

だい みょう び じゅつ

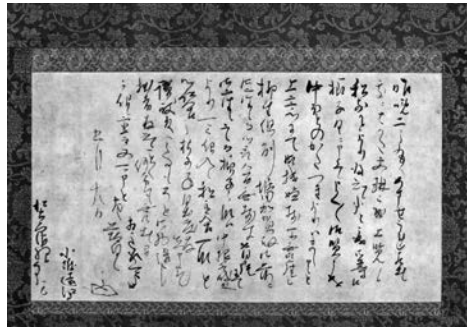
大名の美術

会期 2025年10月21日|火|-12月14日|日|

会場 古美術企画展示室



【出品No1】《唐物茶入 銘「博多文琳」》



【出品No2】小堀遠州《文琳記》

本展は、福岡市美術館に収蔵される黒田資料、松永コレクション等の中から、とくに茶人として名を馳せた大名たちにまつわる美術品を展覧いたします。歴史を紡ぎ、茶の湯を通じて文化を育んだ武将や大名たちの美の世界です。

(学芸課長 後藤 恒)

I 福岡藩黒田家ゆかりの美術

筑前福岡藩の藩祖・黒田如水^{じょすい}〔孝高^{よしたか}〕(1546-1604)、初代藩主・長政(1568-1623)、二代藩主・忠之(1602-54)ゆかりの美術に注目します。

「博多文琳」と小堀遠州

《唐物茶入 銘「博多文琳」》【出品No1】はかつて博多の豪商神屋宗湛^{かみや そうたん}(1551-1635)が所持し、秀吉の所望に対しても「日本の半分となら交換しましょう」と返して断念させたというエピソードは有名で、真偽は不明ですが当時の博多商人の隆盛を物語っています。しかし二代藩主・忠之【16】の時に黄金二千両と知行五百石の代価で召し上げとなりました。

その後のいきさつを語る貴重な資料が、大名茶人・小堀遠州〔政一〕(1579-1647)が忠之へ宛てた二通の書状【2・3】です。【2】は、この茶入を将軍(おそらく二代・徳川秀忠)の上覧に入れた時の様子を報告したもので、将軍はよくご覧になってご機嫌であったと書いています。【3】は、この茶入の袋(仕覆^{さくれ})の裂や仕立てについて「現在の縞柄の裂を用いた袋は、もともとある間道(縞柄)の裂と重複するので、他の丸壺茶入に仕立て替える」など詳細に助言指導する内

容が書かれており、茶道具を介した二人の交流の様子がうかがえます。

遠州は、枯淡な中に華やかさや清らかさを求める「綺麗さび」という美意識を確立し、徳川将軍家の茶道指南役をはじめ諸大名と交流し、時の茶の湯界をリードした人物です。忠之も遠州と交流した一人でした。忠之が手に入れた「博多文琳」は、遠州を介して将軍の上覧を経てその価値を認められ、また格式が整えられ、黒田家秘蔵の重宝となったのです。

黒田如水、長政ゆかりの品

豊臣秀吉の参謀として活躍した黒田如水〔孝高(通称：官兵衛)〕は天正18年(1590)、秀吉の小田原攻めの折、北条氏直の降伏を仲介し無血開城に導きました。【4】の法螺貝はその礼として氏直から贈られたもの。【5】は如水没後まもなく描かれた肖像で、生前の姿をもっともよく残した孝高の肖像画として知られています。

【6～8】は、如水の息子で初代福岡藩主となった長政の所用と伝える品です。長政は関ヶ原合戦で東軍について活躍しました。【6】と【7】は「歯染前立兜」(福岡市博物館蔵)とともに、関ヶ原合戦の前に徳川家康から拝領したもので、これによって家康は長政の同僚

No.	作品名	作者名・産地等	品質	時代	法量(cm)	コレクション名・管理番号
16	宗英公(黒田忠之)像	狩野探幽(1602-74)筆、 沢庵宗彭(1573-1645)賛	紙本着色	江戸時代 17世紀	縦87.3 横36.4	黒田資料 4-B-48
17	褐釉撫三方耳付水指 「王」字銘	高取焼 内ヶ磯窯	陶器	桃山～江戸時代 17世紀	高16.6 最大径19.3	一般古美術資料 14-Ha-97
18	藁灰釉印花竹笹文水指	高取焼 内ヶ磯窯	陶器	桃山～江戸時代 17世紀	高17.7 胴径17.2	一般古美術資料 14-Ha-140
19	褐釉筒水指	高取焼 白旗山窯	陶器	江戸時代 17世紀	高さ14.5 口径12.5	田中丸コレクション (寄託) 田中丸289
20	染付花鳥文水指 共蓋	須恵焼	磁器	江戸時代 19世紀	高さ15.7 胴径15.5	小西コレクション 24-Ha-10
21	韃靼人狩獵図屏風 六曲一隻		紙本着色	江戸時代 17世紀	縦155.7 横334.2	黒田資料 4-B-102
22	○ 芦屋香炉釜	芦屋釜	鉄	室町時代 永正3年(1506)	高17.0 胴径27.2	松永コレクション 6-Hc-105
23	釜鏝	金盛徳元(生没年不詳)	鉄	桃山～江戸時代 16～17世紀	直径8.7(各)	一般古美術資料 (松永耳庵旧蔵) 14-Hc-5
24	釜敷(炉・風炉)		籐	江戸時代 17～18世紀	径14.5(炉用) 径14.0(風炉用)	一般古美術資料 (松永耳庵旧蔵) 14-Hf-9
25	唐物肩衝茶入 銘「松永」		陶器	明時代 15～16世紀	高7.9 胴径6.4	松永コレクション 6-Ha-51
26	唐物茶壺 銘「忘草」		陶器	明時代 15～16世紀	高31.4 胴径30.0	一般古美術資料 14-Ha-21
27	蒲生氏郷消息	蒲生氏郷(1556-95)	紙本墨書	桃山時代 16世紀	縦30.9 横45.1	松永コレクション 6-I-20
28	織部沓茶碗 銘「浜千鳥」	美濃焼	陶器	桃山時代 17世紀	高8.3 最大径14.6	松永コレクション 6-Ha-71
29	細川三斎・沢庵宗彭贈 答狂歌	細川忠興(1563-1645)、 沢庵宗彭(1573-1645)	紙本墨書	江戸時代 17世紀	縦17.5 横41.4	松永コレクション 6-I-21
30	石州竹寸切花入	片桐石州[貞昌] (1605～73)	竹	江戸時代 17世紀	高25.9 径12.2	松永コレクション 6-Hf-90
31	無準師範墨蹟 (与覚聰居士法語)	無準師範(1177-1249)	紙本墨書	南宋時代・ 淳祐7年(1247)	縦31.1 横45.2	松永コレクション 6-I-3
32	○ 韋駄天・猿猴図 三幅対	伝・牧谿(生没年不詳)	絹本墨画	南宋時代 13世紀	縦99.2 横42.8(中幅)	松永コレクション 6-B-9
33	○ 大燈国師墨蹟 (淨慈建後の文)	宗峯妙超(1282-1337)	紙本墨書	南北朝時代・ 建武元年(1334)	縦32.3 横43.2	松永コレクション 6-I-7
34	柿蒂茶碗 銘「白雨」		陶器	朝鮮王朝時代 15～16世紀	高7.5 口径14.2	松永コレクション 6-Ha-58
35	高麗雨漏茶碗		陶器	朝鮮王朝時代 15～16世紀	高8.7 口径15.4	松永コレクション 6-Ha-60
36	特別出品 短刀 拵付	来国光(生没年不詳)	鉄	鎌倉～南北朝時代 14世紀	長29.0 反り0.1	1998年度 本多寿雄様寄贈 14-He-7
37-1	◎ 特別出品 太刀 銘「一」	一文字派	鉄	鎌倉時代 13世紀	長67.0 反り1.5	松永コレクション 6-He-31
37-2	特別出品 梨子地葵紋蒔絵皮巻打 刀拵		木胎漆塗	江戸時代 17～18世紀	総長93.8	松永コレクション 6-Hb-31
38	色絵寿字文鉢	伊万里焼	磁器	江戸時代 17～18世紀	高6.2 口径22.3	2008年度 平岡重子様寄贈 14-Ha-166
39	色絵牡丹唐花文鉢	伊万里焼	磁器	江戸時代 17～18世紀	高7.3 口径23.2	2014年度 安武正作様寄贈 14-Ha-188
40	色絵琴高仙人赤玉文鉢	伊万里焼	磁器	江戸時代 17～18世紀	高8.8 口径22.8	森山コレクション 11-Ha-6
41	染付山水図皿	鍋島焼	磁器	江戸時代 17～18世紀	高7.7 口径29.5	一般古美術資料 14-Ha-30
42	染付桃果文皿	鍋島焼	磁器	江戸時代 17～18世紀	高8.4 口径31.2	一般古美術資料 14-Ha-118



福岡市美術館
FUKUOKA ART MUSEUM

〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051 (代表) FAX 092-714-6071
www.fukuoka-art-museum.jp

の大名・福島正則の説得に当たらせたとされています。

大名茶陶・高取焼

福岡藩の藩窯（御用窯）として展開した高取焼は、長政が朝鮮出兵の際に連れて来た陶工・八山に、筑前直方に永満寺宅間窯【9】を開かせたのが始まりとされます。慶長19年（1614）、同じ直方の鷹取山北側に窯が移され（内ヶ磯窯）本格的な操業を開始。桃山風の作をはじめ優れた茶陶（茶碗、茶入、水指、向付等）を生み出してゆきます【10・13・14・17・18】。忠之【16】の代になり、寛永7年（1630）には白旗山（飯塚市幸袋）の麓に白旗山窯が開かれると、小堀遠州の好みを反映した「遠州高取」と称される瀟洒な作風の茶陶【11・12・15・19】が焼かれました。17世紀後半以降は小石原鼓窯（朝倉郡東峰村）をはじめ各所へ転窯を繰り返しました。

本展示では内ヶ磯窯と白旗山窯の茶入、茶碗、水指の優品を器種ごとに並べて陳列します。当初は桃山様式の気風を色濃く伝えていた内ヶ磯窯の製品が、「綺麗さび」の美意識を反映した白旗山窯の製品へと変容をとげる過程を辿ることができます。

磁器御用窯・須恵焼

須恵焼は、筑前粕屋郡須恵村（現在の福岡県糟屋郡須恵町）で良質の陶石を発見した福岡藩士の新藤安平（生没年不詳）が、宝暦14年（1764）に開窯したことに始まります。やがて福岡藩により皿山奉行が置かれて藩の磁器御用窯として発展しました。途中、藩の庇護が途絶えることもありながら、約140年間の操業期間において、陶工の派遣や招聘などを通じて染付を中心に優れた製品を生産し、筑前国最大規模の磁器窯を誇りました。【20】の水指は優れた出来栄えを示す一品。鉄分の多さからか素地は青みを帯びていますが、焼き上がりは申しぶんなく、胴まわりに描かれた花鳥文の力強さを引き立てています。

Ⅱ 武将・大名茶人の系譜

戦国時代から江戸時代にかけて、大名家の庇護をうけて生み出された、または茶の湯をよくしたことで知られる武将や大名にちなむ茶道具を紹介します。茶会を催すことを「釜を懸ける」、新年最初の茶会は「初釜」と表現します。また利休百首に数えられる有名な一首に「釜ひとつあれば茶の湯はなるものを、数の道具をもつは愚かな（客をもてなす上で大切なのは道具の数ではなく、心遣いなのだ）」という歌があるように、茶の湯釜は茶の湯の象徴といえる存在です。15世紀後半より茶の湯釜の一大ブランドとして名を轟かせたのが福岡県遠賀郡で作られた「芦屋釜」です。当時芦屋を領していたのは山口に本拠を置いた守護大名・大内氏で、筑前芦屋の鋳物師を在郷の麻生氏

を通じて庇護し、優れた金工品が生産されたのでした。【22】は当初香炉として鑄造されたものを茶の湯釜に転用したもの。胴には1506年に制作したと記されており、作られた時期が分かる芦屋製品として重要です。

《唐物肩衝茶入 銘「松永」》【25】は、「松永弾正」の呼び名で知られる大和国の戦国武将・松永久秀（1508-77）が所持したと伝える一品。久秀は織田信長に背いて自害に追い込まれる際、愛蔵の古天明の茶釜「平蜘蛛」を差し出すよう求められたのを拒否し、釜とともに焼死したという説話が残るほど茶の湯をよくしたことでも知られます。

千利休の死後、茶の湯の指導的立場を継承した古田織部【重然】（1544-1615）。彼が考案した茶碗は「ヘウケモノ（ひょうげた茶碗）」と呼ばれるほど、形を大胆にひずませたものでした。《織部沓茶碗 銘「浜千鳥」》【28】はその一例で、織部が求めた破調の美をよく映し出しています。

織部に茶の湯を学んだ数多くの大名茶人を代表するのが、前章にも登場した小堀遠州です。織部の茶の湯を消化し、「綺麗さび」と呼ばれる新たな美意識によって、時の茶の湯界の指導的立場にあった遠州は、あらゆる人々から頼まれて茶道具に対する評価や、附属物の仕立て等について監修を行いました。「忘草」と命名された【26】の茶壺には遠州の添状が附属しており、遠州が『伊勢物語』第百段所収の歌に着想してこの銘を付けた旨が記されています。

信長、秀吉に仕え、伊勢松坂城や陸奥黒川城の城主を務めた蒲生氏郷（1556-95）は、古田織部、細川三斎（後述）らとともに利休の高弟7人をいう「利休七哲」の筆頭に挙げられる武将です。【27】は氏郷が医師・施薬院全宗（1526-99）にあてた書状で、鷹狩で留守中の訪問を詫び、御茶を賜る予定に対する礼を述べています。謹直にして素早い運筆には武将茶人の気概が偲べれます。

豊前小倉藩の初代藩主を務めた細川三斎【忠興】（1563-1645）も「利休七哲」の一人。【29】は同時代の著名な禅僧・沢庵宗彭（1573-1646）との歌のやりとりが書かれたもので、三斎が居留守を使って用事を済まそうとし、来訪予定の沢庵にその旨の歌を詠んで連絡の手紙を出したところ、その余白に沢庵が返歌を書いて返信としたものです。二人の親交の深さがうかがえます。

大和小泉藩主の片桐石州【貞昌】（1605-73）は、千利休の倅び茶の精神を継承し、四代將軍・徳川家綱の茶道指南役となり、のちに江戸幕府の武家茶道の流派「石州流」の流祖とされています。【30】は石州自作の竹花入。【31】は中国南宋時代の禅僧・無準師範の晩年期の墨蹟で、禅僧・玉舟宗瑤（1600-68）が石州にあててこの墨蹟が真筆であることを証する内容の添状が附属していることで、石州が所持していたこ

とが判明しています。

江戸時代後期の大名茶人を代表するのが出雲国松江藩七代藩主・松平不昧【治郷】（1751-1818）です。56歳の時に家督を長男に譲り、江戸品川に造営した広大な下屋敷にて多くの大名や文化人と交流しました。青年期から茶と禅を学び「不昧流」と称される茶禅一味の茶風をつくるとともに、多くの名物茶道具を蒐集し、それらの購入記録を『雲州蔵帳』にまとめました。【32～34】は『雲州蔵帳』所載の作品です。【35】の茶碗は不昧に寵遇された目利き・吉村観阿が所持したもので、真塗りの内箱の蓋の表裏に不昧の字形による銘と歌が施されています。

Ⅲ 献上・贈答の磁器

最後に、肥前有田で生産され、將軍家や大名家の献上・贈答に用いられた絢爛豪華な磁器を取り上げます。伊万里焼は、佐賀県西松浦郡有田町を中心とする九州西部の肥前地方で焼かれた磁器の総称です。製品の多くが有田の北方に位置する伊万里の港から出荷されたためにこの名があり、別名に有田焼、あるいは肥前磁器ともいいます。その中で元禄～宝永年間（1688-1711）を中心に焼かれた金襴手の最上級品を、俗に「献

上伊万里」（「型物伊万里」とも）【38～40】と呼びます。中国明時代の嘉靖年間（1522-66）の金襴手を手本とし、染付の下地に赤、黄、緑、紫など多くの色絵具と金を用いて、緻密かつ濃艶な文様で装飾した、見るも豪華な器です。「献上」とは大名家をはじめとする貴人への献上を意味しますが、実際にはそれに限らず、豪商、豪農など国内の富裕層の需要に応じた高級磁器でした。

いっぽう、將軍家への献上を主目的とし、大名家や公家などへの贈答のために特別に作られたのが肥前鍋島藩の藩窯・鍋島焼です。寛永5年（1628）年に有田町の岩谷川内で開窯したと伝え、寛文年間（1661-73）に有田町の西部にある南川原山に窯を移し、さらに延宝3年（1675）には伊万里の大川内山に移動したといいます。鍋島焼の献上品は皿を中心とし、規格・技法・意匠などに対する藩の厳しい管理統制の下、洗練された美意識と技巧の粋が追求されました。皿の器形は木盃形に統一し、径は一尺、七寸、五寸などと定め、絵付の意匠は和様を基調としつつ、伝統に拘泥しない独創性が要求されました。本展ではその最盛期とされる元禄年間を中心する時期の一尺皿の優品2点【41・42】を展示します。

- ・出品作品はすべて福岡市美術館の収蔵品及び寄託品です。
- ・◎は重要文化財、○は重要美術品を示します。
- ・都合により展示作品を変更する場合があります。

出品作品リスト

No.	作品名	作者名・産地等	品質	時代	法量(cm)	コレクション名・管理番号
1	唐物茶入 銘「博多文琳」		陶器	明時代 15～16世紀	高6.4 胴径6.4	黒田資料 4-Ha-3
2	文琳記	小堀遠州(1579-1647)	紙本墨書	江戸時代 17世紀	縦28.0 横50.9	黒田資料 4-I-6
3	文琳茶壺之記	小堀遠州(1579-1647)	紙本墨書	江戸時代 17世紀	縦34.4 横50.9	黒田資料 4-I-5
4	法螺貝(北条白貝)		貝	桃山時代 16世紀	長37.5(大) 長15.7(小)	黒田資料 4-Hf-172
5	如水居士像	春屋宗園(1529-1611)賛	絹本着色	桃山時代 17世紀	縦108.5 横49.8	黒田資料 4-B-43
6	梵字采配		紙、木胎漆塗	桃山時代 16～17世紀	長33.8	黒田資料 4-Hf-169-2
7	梨子地三葉葵紋截金 鞆・鎧		木胎漆塗	桃山時代 16～17世紀	鞆:居木長40.0 鎧:長30.5(各)	黒田資料 4-Hb-164
8	金襴軍袍(亀甲地文牡 丹唐草金襴)		絹、錦織	桃山時代 16～17世紀	丈98.6 裾69.0	黒田資料 4-Hd-181
9	藁灰袖肩衝茶入	高取焼 永満寺宅間窯	陶器	桃山時代 17世紀	高8.5 胴径6.6	一般古美術資料 14-Ha-20
10	褐釉耳付茶入 銘「霧島」	高取焼 内ヶ磯窯	陶器	桃山～江戸時代 17世紀	高9.1 胴径6.5	一般古美術資料 (黒田家伝来) 14-Ha-120
11	黄釉耳付茶入	高取焼 白旗山窯	陶器	江戸時代 17世紀	高9.7 胴径5.8	一般古美術資料 14-Ha-48
12	褐釉瓢形茶入 銘「貯月」	高取焼 白旗山窯	陶器	江戸時代 17世紀	高さ8.4 胴径6.5	田中丸コレクション (寄託) 田中丸279
13	掛分割高台沓茶碗	高取焼 内ヶ磯窯	陶器	桃山～江戸時代 17世紀	高7.0 最大径14.1	一般古美術資料 14-Ha-4
14	桃形茶碗 銘「三千歳」	高取焼 内ヶ磯窯	陶器	桃山～江戸時代 17世紀	高7.7 口径13.8	一般古美術資料 (黒田家伝来) 14-Ha-83
15	掛分面取半筒茶碗	高取焼 白旗山窯	陶器	江戸時代 17世紀	高7.8 口径11.0	一般古美術資料 14-Ha-82